

7. 図書・出版・情報・広報

(1) 図書

a. 図書資料購入費・受入冊数

2005～2012 年度における、センターの予算による図書購入費と受入冊数は下表のとおりである。資料費は、年間 3000 万円強から、5000 万円弱の間を変動している。財源的には、運営費交付金の図書費が、期間中にほぼ半減し、逐次刊行物と製本をまかなうといくとも残らない状況で、1990 年代の、通常図書費のほかに数百万円の特別設備費が措置されていたころとは大きく環境が変わった。そのため、最近では、新刊書の購入の大部分は、科研費や GCOE などのプロジェクト経費に依存している。2003～2007 年度は 21 世紀 COE プログラム、2008～2012 年度は新学術領域研究、2009～2013 年度(予定)の GCOE プログラムが進行したことが、資料の購入を支えた。2008 年度(実施は 2009 年度)に購読逐次刊行物の見直しを行ったが、2013 年度に再度大規模な見直しを行い、2014 年度から実施予定である。また、2011 年より FBIS、2012 年より Integrum という、2 つのオンラインデータベースを導入した。

2006-2012 年度の図書資料購入費・受入点数

(千円)

	2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
資料費総額	41,222	40,377	31,614	45,808	42,166	49,410	34,049
運営費交付金・図書費	24,824	22,725	18,709	20,225	12,844	15,151	11,213
科研費	7,732	9,992	9,797	11,546	16,552	18,043	12,522
その他	8,666	7,659	3,108	14,037	12,770	16,216	10,314

(冊)

受入総数	8,032	4,386	2,850	4,104	6,217	5,274	4,477
和書	261	243	264	515	413	1,027	447
洋書	7,498	3,023	1,436	2,746	4,978	3,333	3,865
マイクロ資料	262	1,048	1,124	710	798	907	157
その他	11	72	26	133	28	7	8

7. 図書・出版・情報・広報

b. 図書室利用者数・貸出数

センター図書室では、書誌、事典、語学辞典などの参考図書の閲覧、カレントな新聞・雑誌の閲覧、マイクロ資料の利用のほか、附属図書館書庫に移動する前の資料の閲覧・貸出などが行われている。下記の入室者数は、センターの専任研究員以外の数である。

2005-2012 年度の利用者数、貸出数

(人)

	入室者数(延べ)	学外利用者数(延べ)	館外貸出点数	うち学生・大学院生
2006 年度	1,097	204	1,920	830
2007 年度	907	134	1,663	708
2008 年度	390	158	931	501
2009 年度	800	124	1,045	274
2010 年度	1,124	308	1,330	871
2011 年度	1,134	158	1,596	497
2012 年度	1,050	224	1,235	452

利用者の動向に影響するものとして、以下のことがあった。センターの耐震改修工事による仮設先への移転のため、2008 年 7 月 14 日～8 月 5 日まで図書室を閉室した。同年 8 月 5 日～翌 2009 年 4 月 13 日までは、文系共用棟(バックアップ施設)1 階においてサービスを再開したが、その間、新聞バックナンバーや参考図書の大部分、シェベロフなどのコレクション類は利用停止となった。その後、工事の完了を受けて、2009 年 4 月 14 日より 5 月 26 日まで閉室して移転・開館準備を行い、5 月 27 日より開室した。このことは、2008～2009 年度の入室者数、貸出点数に影響したと考えられる。また、この仮移転と並行して 2008 年 7～9 月に、学位論文と和書を中心とする約 13,000 冊を附属図書館に移動した。さらに、2012 年 11 月～2013 年 1 月には、露文資料と北米の学位論文あわせて約 22,000 冊を附属図書館に移動した。

c. 主な収集資料

2006-2012 年度の収集資料中、主だったものは、以下のとおりである。なお、このうち、最後の 2 つは、ご遺族もしくは関係者より寄贈いただいたものである。

非ソヴィエト系ロシア革命・新聞コレクション
『軍事論集』(1858-1917 年)
ハプスブルク帝国期オーストリア議会議事録(1861-1918 年)
島田元太郎文書(寄託)
ソ連邦共産党中央委員会総会文書
ソ連邦共産党・国家文書(1995 年度より継続中)
トゥルケスタン集成 電子版
外国人の見たロシア
ロシア=オスマン関係図書 第 4 期
アジア関係ロシア軍諜報資料
『モスクヴィチャニン』(1841-1856 年)
『東洋学院紀要』(1899-1916 年)
ロシア・ウクライナ現代美術史資料(1907-1930 年)第 1 部
『帝室正教パレスチナ協会通信』(1886-1926 年)
『歴史評論』(1890-1926 年)
『農業と林業』(1865-1913 年)
『漁業』(1921-1954 年)
『正教評論』(1860-1891 年)
中国少数民族旧記刊行集成
シベリア革命・内戦期新聞集成 電子版
『党建設』(1929-1941 年)
『党生活』(1954-1967 年)
『社会主義経済』(1923-1930 年)
工藤幸雄氏旧蔵資料(主にポーランド文学)
松本忠司氏旧蔵資料(主にロシア文学)

(2) 出版

レフェリー制の雑誌としては、従来からの『スラヴ研究』と *Acta Slavica Iaponica* に加えて、センターにおけるグローバル COE プロジェクト「境界研究の拠点形成」の実施に関連して、『境界研究』と *Eurasia Border Studies* を刊行するようになった。

ディスカッション・ペーパーとしては、従来からの『スラヴ研究センター研究報告シリーズ』に代わり、2008年から『スラヴ・ユーラシア研究報告集』を刊行している。21世紀 COE プログラムと新学術領域研究の実施期間においては、それぞれのプロジェクトに関連するディスカッション・ペーパーを出版した。

書籍としては、従来からの *Slavic Eurasian Studies* に加えて、出版社とのタイアップでいくつかのシリーズを刊行した。そのうちの1つは、北海道大学出版会との提携による『スラヴ・ユーラシア叢書』である。これは、センターにおける研究成果を幅広い市民の皆さんに知ってもらうことを目的として、刊行が始められた。センター内に叢書刊行委員会が設けられ、その審査を通ったものが出版される。基本的には、センターの教員が著者・編者になったものが出版の候補となるが、センターを中心に行われたプロジェクトの成果として、他大学教員やスラヴ社会文化論専修の大学院生を編著者とする本が出版されたケースもある。このほか、21世紀 COE プロジェクトの成果が講談社との連携で3巻本として出版され、新学術領域研究の成果がミネルヴァ書房との連携で6巻本として刊行される予定である。外国の出版社との連携としては、Routledge 社の出版による宇山智彦編の刊行物がある。

a. レフェリー制の雑誌

・『スラヴ研究』

和文学術雑誌。論文には数ページの英語またはロシア語の要約が付く。投稿の資格制限なし。年一回刊行。

巻号 (年)	53 (2006)	54 (2007)	55 (2008)	56 (2009)	57 (2010)	58 (2011)	59 (2012)
投稿数	17	22	16	13	15	16	9
うち採択数	13	9	9	8	6	8	5

・*Acta Slavica Iaponica*

欧文学術雑誌(英語またはロシア語)。投稿の資格制限なし。2009年度から原則として年二回刊行に移行。

巻号 (年)	24 (2007)	25 (2008)	26 (2009)	27 (2009)	28 (2010)	29 (2011)	30 (2011)	31 (2012)	32 (2012)
投稿数	24	24	29	資料無し	12	15	11	14	15
うち採択数	15	11	9	8	6	7	4	5	6

・『境界研究』

境界研究の和文学術雑誌。投稿の資格制限なし。グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成:スラヴ・ユーラシアと世界」の成果刊行物。年一回刊行。

巻号 (年)	1 (2010)	2 (2011)	3 (2012)
投稿数	9	10	10
うち採択数	8	8	7

• *Eurasia Border Review*

境界研究の英文学術雑誌。投稿の資格制限なし。グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」の成果刊行物。原則として年二回刊行。

巻号 (年)	Vol. 1 No. 1 (2010)	Vol. 2 No. 1 (2011)	Vol. 3 No. 1 (2012)	Vol. 3 Special Issue (2012)	Vol. 3 No. 2 (2012)
投稿数	9	11	10	7	11
うち採択数	8	6	7	7	8

b. センターで出版されたその他の出版物数

シリーズ名/年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集(欧文/和文)	7	5					
Slavic Eurasian Studies(欧文、21 世紀 COE プログラムの欧文論文集として発刊し、プログラム終了後も継続。表の下に一覧)	6	4	2	2	1	1	1
スラブ・ユーラシア研究報告集(欧文/和文、『スラブ研究センター研究報告シリーズ』の趣旨を受け継いだディスカッション・ペーパー)			1		2	1	1
比較地域大国論集(欧文/和文、新学術領域研究のディスカッション・ペーパー)				3	2	3	5
その他(名簿、科研費による出版物など)	1	2				2	
計	14	11	3	5	5	7	7

• **21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies**

- No. 10 *Reconstruction and Interaction of Slavic Eurasia and Its Neighboring Worlds* (家田修、宇山智彦編著)(August 2006)
- No. 11 *Dependent on Oil and Gas: Russia's Integration into the World Economy* (田畑伸一郎編著)(August 2006)
- No. 12 *Ислам от Каспия до Урала: макрорегиональный подход* (松里公孝編著)(January 2007)
- No. 13 *Imperiology: From Empirical Knowledge to Discussing the Russian Empire* (松里公孝編著)(March 2007)
- No. 14 *Empire, Islam, and Politics in Central Eurasia*(宇山智彦編著)(March 2007)
- No. 15 *Regions in Central and Eastern Europe: Past and Present*(林忠行、福田宏編著)(March 2007)
- No. 16 *Eager Eyes Fixed on Eurasia*
 Vol. 1 *Russia and Its Neighbors in Crisis* (岩下明裕編著)(June 2007)
 Vol. 2 *Russia and Its Eastern Edge* (岩下明裕編著)(June 2007)

7. 図書・出版・情報・広報

- No. 17 *Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context*(望月哲男編著)(March 2008)
- No. 18 *Приднестровье в макрорегиональном контексте черноморского побережья*(松里公孝編著)(March 2008)
- No. 19 *Energy and Environment in Slavic Eurasia: Toward the Establishment of the Network of Environmental Studies in the Pan-Okhotsk Region*(田畑伸一郎編著)(July 2008)
- No. 20 *Регионы Украины: хроника и руководители. Т. 3. Крым и Николаевская область*(松里公孝編著)(March 2009)
- No. 21 *Post-Communist Transformations: The Countries of Central and Eastern Europe and Russia in Comparative Perspective*(林忠行、大串敦編著)(May 2009)
- No. 22 *Comparative Imperiology*(松里公孝編著)(March 2010)
- No. 23 *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives*(野町素己編著)(December 2010) (Revised and Enlarged, November 2011)
- No. 24 *The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives*(野町素己編著)(November 2011)
- No. 25 *Slavia Islamica: Language, Religion and Identity*(ロバート・グリーンバーク、野町素己編著)(2012)

c. 出版社とのタイアップで発売された出版物

・スラブ・ユーラシア叢書

(スラブ研究センターの研究成果、北海道大学出版会刊 和文)

- 『スラブ・ユーラシア叢書 1 国境・誰がこの線を引いたのか: 日本とユーラシア』岩下明裕編著、2006年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 2 創像都市ペテルブルグ: 歴史、科学、文化』望月哲男編著、2007年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 3 石油・ガスとロシア経済』田畑伸一郎編著、2008年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 4 近代東北アジアの誕生: 跨境史への試み』左近幸村編著、2008年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 5 多様性と可能性のコーカサス: 民族紛争を超えて』前田弘毅編著、2009年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 6 日本の中央アジア外交: 試される地域戦略』宇山智彦、クリストファー・レン、廣瀬徹也編著、2009年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 7 ペルシア語が結んだ世界: もうひとつのユーラシア史』森本一夫編著、2009年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 8 日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』岩下明裕編著、2009年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 9 ポスト社会主義期の政治と経済: 旧ソ連・中東欧の比較』仙石学、林忠行編著、2011年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 10 日露戦争とサハリン島』原暉之編著、2011年
- 『スラブ・ユーラシア叢書 11 環オホーツク海地域の環境と経済』田畑伸一郎、江淵直人編著、2012年

・講座スラブ・ユーラシア学

(21世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」の研究成果 講談社刊 和文)

『講座 スラブ・ユーラシア学第1巻 開かれた地域研究へ:中域圏と地球化』家田修編、2008年

『講座 スラブ・ユーラシア学第2巻 地域認識論:多民族空間の構造と表象』宇山智彦編、2008年

『講座 スラブ・ユーラシア学第3巻 ユーラシア:帝国の大陸』松里公孝編、2008年

・シリーズ・ユーラシア地域大国論

(新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の研究成果 ミネルヴァ書房 和文 各班から全6巻
刊行予定)

『シリーズ・ユーラシア地域大国論1 ユーラシア地域大国の持続的経済発展』

上垣彰、田畑伸一郎編著、2013年3月

『シリーズ・ユーラシア地域大国論2 ユーラシア地域大国の統治モデル』

唐亮、松里公孝編著、2013年3月

・*Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*

(センター2007年度冬期国際シンポジウム報告集、宇山智彦編著、Routledge、2011年 英文)

d. スラブ・ユーラシア研究者名簿

この名簿は、我が国の旧ソ連・東欧およびその関連地域に関する人文・社会科学分野を中心とした研究者を収録したものである。約40年前からタイトルを変えつつ3~5年の間隔で刊行され、現在のところ2012年3月刊行の第9版が最新のものである。各種学会名簿、専門誌執筆者、データベース等から採録した千数百名の方にアンケートを送り、掲載可の返事を得られた方々のみ収録している。以前は主要図書館にも発送していたが、現在は掲載可の返事を得られた方々にのみ配布している。

共同利用・共同研究拠点に認定されたセンターとして、この名簿が研究コミュニティにとって共同研究の組織や当該分野の研究状況の概観等に役立つことを期待している。また、希望する方の自宅住所・電話も掲載しているため、個人情報の取り扱いが何かと窮屈な昨今、かえって希少価値があるとの評価を受けることがある。

(3) 情報（ウェブサイト）

センターは 1996 年 4 月にウェブサイトを開設して以来、その内容を次第に充実させ、シンポジウム・研究会や公募情報等の迅速な案内、シンポジウム・ペーパーの事前掲載(パスワードつき)、さまざまなデータベースの公開といった取り組みを他の研究機関に先駆けて行ってきた。特に、センターが刊行する雑誌・論文集・研究報告集等全文の PDF 版掲載は、国内外の研究者に好評であり、センターの研究成果が広く利用・引用されることを助けている。

本ウェブサイトの特徴の一つとして、多言語対応が挙げられる。センターの性格上日本語、英語はもとよりロシア語を主たる研究上の言語として使用する研究者も多く、現在のように日本でも UTF-8 が標準的に使用されるようになる以前から、多言語対応に向けた取組を実施している。現在ウェブサーバー上では、日本語、英語、ロシア語、中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、アラビア語、アゼルバイジャン語、アルバニア語、アルメニア語など、スラブ系言語を中心に周辺国の言語も合わせて 45 カ国語をサポートしている。

また、2012 年 12 月に、トップページのデザインを一新し、合わせて構成を一部変更した。主な変更点は以下の通り。

1. 旧来は大見出しにカーソルを当てないと見ることができなかった項目名をトップページに直接表示するなどし、センターの活動内容が一望できるようにした。
2. 「共同利用・共同研究拠点」、「学部などでの教育」などのコーナーを新設した。
3. サイト内検索を Google カスタム検索に変更し、またセンター関連の複数のドメインを横断検索できるようにした。

なお、2011 年頃までは、センターのウェブサイトへのアクセス数を定期的に発表していたが、ウェブサイトの機能の多様化や研究の質的な広がり等に併せて、センター関連の複数のドメインができており、過去の経緯からそれが複雑に絡み合っていること、トラッキング拒否機能への対応等から、アクセス数の解釈及び解析が複雑になり、それへの対応が難しいことなどのため、現在、アクセス数の計測・公表を行っていない。

(4) 広報

a. スラブ研究センターニュース

1) 和文

1979年に創刊された。当初はシンポジウムのお知らせ、外国人研究員の来日や図書室だよりを、ごく簡単に数ページ程度で伝える程度だったが、ほどなく年4回の季刊となり、行われたシンポジウムの模様、エッセイ、学界短信など、豊富な写真とともに掲載されるようになり、ページ数は20ページ程度に増えた。その時々センターの活動を把握できる重要な資料となっている。

主な大学図書館や、共同研究員などに約800部配布され、スラブ・ユーラシア研究者間のコミュニケーションに役立てられている。

2) 英文

1993年に創刊された。年1回刊行。当時の外国人研究員 Löwenhardt 氏の発案「これほどの研究センターに英文のニューズレターがないのはおかしい」による。内容は、当初、センター長のあいさつ、外国人研究員の紹介、図書室だより、出版された本のリストなど数ページから始まったが、現在はエッセイ、シンポジウムの様子などが多くの写真とともに加わり、ページ数は20ページ程度である。

外国のスラブ・ユーラシア研究関係諸機関、過去の外国人研究員などに約400部発送され、センターの広報に役立っている。

b. スラブ研究センター (SRC) メールマガジン

センターが関わる研究活動やその最新の成果などを、広く共有してもらうために、2009年2月、当時のセンター長の発案でメールマガジンを立ち上げることになった。月1度センター内部のスタッフ全員と共同研究員他各種研究員、希望者など約500人に送信している。

内容はおもに、特別プロジェクトを含むセンターが関わる行事の予定、本の刊行、各種募集、エッセイなどで、それぞれの簡潔な概要とウェブサイトへのリンクを載せている。